

期間 26年 11月4日(火)～12月9日(火) [全6回]

応募締切
26年 10月21日(火)

実施場所 九州国際大学地域連携センター(サテライト・キャンパス)
〒806-0021 八幡西区黒崎3-15-3 コムシティ2階(38ページ地図参照)

申込・問合せ先 九州国際大学地域連携センター 担当：今井・片山
〒806-0021 八幡西区黒崎3-15-3 TEL：631-2203 FAX：631-2204

時間 18:30～20:00 (11月11日は18:30～21:00) 定員 30名 受講料 4,000円

コース概要

実施機関：九州国際大学地域連携センター

世界文化遺産としてユネスコに政府推薦された「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」は、九州・山口を中心とした幕末から明治期の石炭・製鉄・造船の産業遺産から構成されています。

これらの「顕著で普遍的な価値(OUV)」を考えるためには、わが国の産業革命の歴史的な意義と石炭・製鉄・造船の果たした役割を押さえる必要があります。また、特に世界遺産登録を考える場合には、登録が実現した「富岡製糸場」との違いを明確にする必要があります。

そこで、幕末～明治期の技術史・経済史の視点から、「明治日本の産業革命遺産」の歴史的な価値について考えていきます。

月 日	テーマ・内容	担当講師
11月4日 (火)	日本の産業革命(概説) 世界で最初の産業革命を遂げたイギリス、そして欧米大陸への波及を事例として、 (1)そもそも「産業革命」をどのように考えるか (2)後発国の工業化がどのような特徴を持ったか について整理をします。 これらを踏まえて、後発・後進の日本における工業化の歴史過程とその特徴をおさえます。	九州国際大学 特任教授 清水 憲一
11月11日 (火)	衣・食の技術革新と工場生産から始まる：軽工業 官営模範工場の富岡から改良器械製糸の信州に展開することによって、生糸輸出世界一の外貨獲得産業として成長しました。輸入代替から輸出産業へと成長した綿業は典型的なキャッチアップを実現しました。明治期の最大工業部門である食品工業においても、洋式技術を導入して新商品が開発されていきました。	
11月18日 (火)	工業化に必要なエネルギー資源は自前で：石炭産業 幕末の高島炭鉱で始まった洋式採炭は、工場動力エネルギー資源として大量供給していく中で、筑豊・三池が主要産炭地となっていきました。 山本作兵衛画も参照しながら、産業革命期の石炭産業・筑豊炭田の急速な成長とその要因を考えます。	
11月25日 (火)	「貿易立国」の海運業を支えるために育成された造船業 外国商人・海運業によって支配されていた貿易の取扱は、日本郵船と大阪商船に対する政府保護によって内外航路を開設・拡充することで優位な状況を切り開くと同時に造船奨励法によって、汽船の輸入から国産化へと転換しました。1898年の三菱長崎造船所による「常陸丸」建造は、造船技術の世界水準到達を示すものでした。	
12月2日 (火)	増大する軍需と民需に対応する「鋼の時代」の銑鋼一貫製鉄所 幕末の反射炉・木炭高炉の築造、八幡以前の3官営鉄山と洋式製鉄技術導入の挑戦が挫折した後、「鋼の時代」の銑鋼一貫製鉄所として官営八幡製鉄所が建設されました。 「高炉操業中止」後、お雇い外国人を解雇して日本人技術者の手で操業を再開し、創立事業を終えた1910年には、作業会計は黒字を実現し、経営的な見通しを確立しました。	
12月9日 (火)	まとめ 事例を踏まえて、技術導入・定着の特質を整理し、短期間に急速な工業化を実現した要因を考えます。そして、この工業化における石炭・製鉄・造船の重要な意義を、 (1)軽工業 (2)アジア(印・中)の工業化 との比較によって、確認します。	